Osaka University Knowledge Archive

Title	家族の死による立ち直りと死生観の変化
Author(s)	豊田, 幸子
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1996, 1, p. 52-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5414
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

家族の死による立ち直りと死生観の変化

豊　田　幸　子

1 問題意識

人が皆、平等に、そして確実に体験することは「死」である。しかし、実際の日常生活で、「死」を話題にすることは希で、特に、若者が「死」について語り合うなんてことは、タブーで、辛気くさい、という暗黙の了解がある。しかし自分はまだまだ死なないと思っていても、身近な人が亡くなってしまうことで、遠い存在であった「死」に向き合わなければならなくなる。特に自分の家族の一人が死に向かっていくのを見るとき、自分自身の生き方を見つめ、自己の有限性に気づき、その人の人生観までもが変わるのだろうか。つまり、実際の（残された）家族への接し方が変わったり、死に対する考え方が変わったりするのであろうか。

2 調査

以上のような問題意識のもと、家族を亡くした人が、どのような苦痛を体験し、立ち直っていき、家族関係や、価値観が変わるかを調べることにした。調査に向けては、野田正彰（1992）の遺族の悲哀の研究、また、柏木哲夫（1992）の末期患者の痛みの全人的理解の研究なども参考にした。野田（1992）は、遺族の属性、すなわち、性別、年齢、家族形態等が悲哀に影響していることを述べている。筆者は、遺族が持つ価値観も悲哀に関連していると考え、本論の調査に宗教の項目を加えることにした。

また、柏木（1992）は、末期患者の痛みを全人的理解するにあたって、身体的、精神的、社会的、霊的苦痛という区分を用いている。このことを参考に、遺族にとっても患者との死別後に体験するつらさは全人的苦痛と捉えることができるのではないかと考え、検討することにした。

調査対象は淀川キリスト教病院内ホスピスで亡くなった患者の遺族である。

3 結果と考察

回答者の属性を①性別、②年齢、③家族形態、④信仰している宗教、⑤患者との間柄、&立ち直りの有無で整理しながら以下のようなことが考察できた。

3-1.　家族との死別によって体験する苦痛で、身体的苦痛は、65歳以上のお年寄りに多かった。また、今尚体験している苦痛は、精神的（涙もろさ、うつ気分など）、霊的（寂寥感、自責の念など）、社会的苦痛（興味の低下、家にこもりがちなど）が多く、特に立ち直っていない人はそれらの苦痛が残されがちであることがわかった。

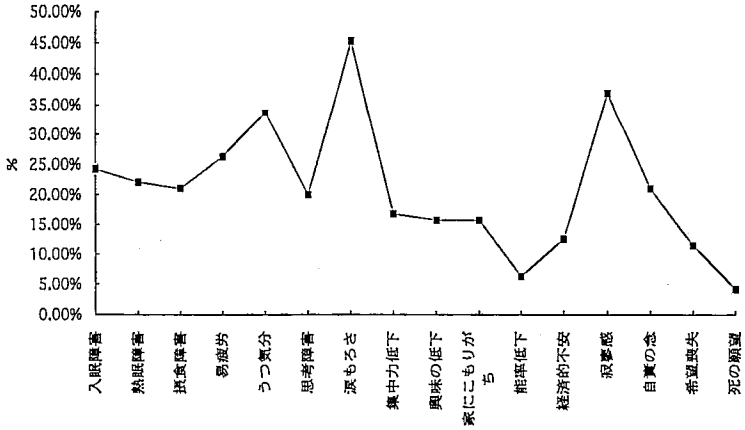

Fig.-1 死別後体験する苦痛

3-2.　患者との死別後、つらい期間に助けになったものは、全体で見ると「患者の安らかな死」が最も多く、「家族の支え」、「患者に十分世話をしたこと」、「友人の支え」、「時間が解決」の順であった。

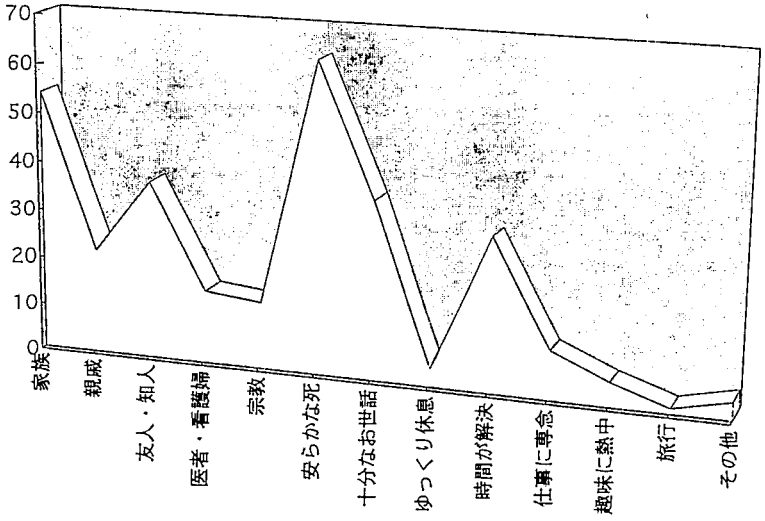

Fig.-2 つらいときの助け

3-3.　患者の死後1年半～2年半経って、悲しみから立ち直れていない、と思われる人は少なく、ほとんどの人が6ヶ月前後で立ち直っている。しかし、立ち直っていない人は、65歳以上や、夫が多かった。

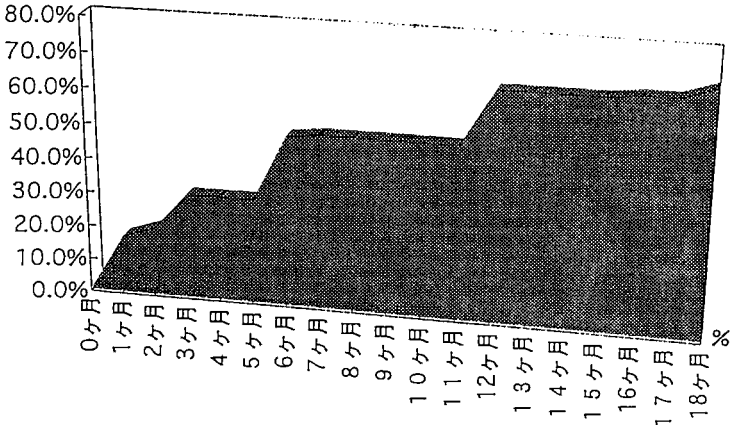

Fig.-3 死別から立ち直るまでの期間

3-4.　家族とのコミュニケーションの変化

家族の接し方の調査から、死別体験によって家族とのコミュニケーションは、実際の接し方が密になるというよりも、家族のことを思う気持ちが一層増すことのではないかと考えられた。

3-5.　死生観の変化

ア）生きていくうえで、<時間を貴重に思う>ようになった、と答えた人は多かったが、<充実した生活をする>、<積極的思考ができる>ようになったと答えたひとはそれほどでもなかった。

イ）患者さんの死によってどのように死への意識が変わったかの調査では、<死を身近に意識する>ようになる人は多いが、<死後について考える>までには至らないことがわかった。（ここでは立ち直っていない人は死を身近に感じてはいるものの、死のことを口にしなくなっている人が多く見られることがわかった。また、宗教の比較では、仏教とキリスト教の来生観の違いがうかがえた。）

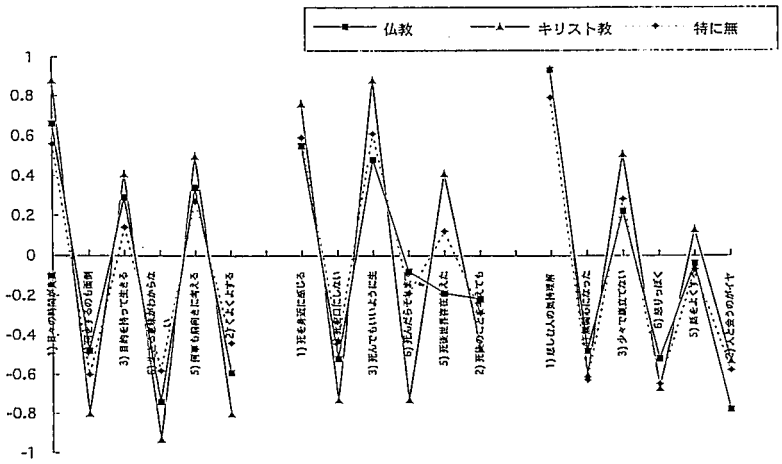

Fig.-4　死生観の変化　宗教比較

ウ）他人との関係についての調査では、死別体験によって、対人関係は、共感性は高まるが、他人に対する接し方までは変わらないのではないかと推測できた。

4 今後の展望

4-1．喪の仕事について

悲しみ、喪に伏せることは、しばしば否定的に捉えられ、よく思われないことがあるが、悲哀も人生に於いて、なくてはならない感情である。キューブラー・ロス（1971）も、「遺族に話させ、泣かさせ、もし必要なら絶叫させよ。」と言って、つらい感情を表出することの大切さを説いている。亡くなった人が、遺族にとって大切であればあるほど、傷は深く、よって悲しみも大きい。その時に、つらい思いや、罪悪感などを、しっかり誰にも邪魔されずに表現することが重要なのである。しかし本論の調査で示唆されたように、男性は、女性より感情を抑える傾向があるうえ、自ら進んで他と交流を持とうとすることは少ないようである。私達は、決してお節介になってはいけないが、そのように感情を表現できないでいる人が、孤立し、思い詰めてしまわないように、身近について見守りつつ、いつでも聞き手になってあげられるように気を配る必要がある。

4-2．遺族への援助

患者との死別後、つらい時期に助けになりうるものとしては、まず、患者が安らかになくなったことなどの《十分な看護》であった。調査対象は、淀川キリスト病院のホスピスで患者を看取られた家族であったため、ホスピスでの十分な症状のコントロールを患者が受け、安らかに亡くなり、また多くの遺族が、そのことによって悲しみを乗り越えていけた、ということがわかった。

今後、患者の症状が十分にコントロールされ、安らかな死が迎えられるホスピスがますます増え、また一般の病棟でも、ホスピスケアが進められるよう、これからの医療の発展に期待したい。

4-3．調査の反省

本調査は、淀川キリスト教病院内ホスピスで、家族を亡くされた遺族を対象にしたものであり、看取られてから、1年半～2年半も経過しているにもかかわらず、たくさんの人がアンケート調査に協力して下さったことに心から感謝したい。

アンケート調査項目の反省点としては、家族のコミュニケーション、死生観の変化を量るための尺度項目の数が十分でなかったことが挙げられる。しかし、本調査は遺族を対象にしたアンケートであり、高齢で弱っている人も多いので、項目の量としては、これで精一杯だったかもしれない。

分析方法の反省点としては、

①回答者の属性別に分析を進めたが、属性同志を組み合

わせてクロス集計をすること。
②死別後体験した苦痛、つらいときの助け、立ち直り、価値観の変化と個別に見ていったが、全体を通じて、どのような苦痛を体験した人が、どのような助けを受け、立ち直っていったか、を把握すること。
③死生観の変化で信仰している宗教の違いによって、死後の世界に対する考え方が違ってくることがわかったが、宗教別の死生観を文献などではっきり確かめること。
などを今後検討していく必要がある。

4-4．それぞれの重みのある死

この調査を分析しながら、また遺族の方の一人一人の記述を読みながら実感したことは、「ある人が死ぬ」、ということは言葉に表せないほど、つらく悲しいことであり、アンケート調査だけでは、看取った人の苦しみはとても十分に推し量れはしないということである。また、看取り後、その人に起こった内面の変化は、個人によって様々であり、簡単にパターン化できるものでないということも改めて認識した。確かに、調査対象の平均から、全体の傾向はみれた。しかし、家族の死によって、「家族の良さを実感した」という人もいれば、逆に「溝ができた」という人もいる。その人と故人の生前のに築かれた関係、また死別後に起こった出来事などは人それぞれによって全く唯一の体験なのである。また、どちらが良くて、どちらが悪い、という言い方は決してできない。また、死別後の悲哀から立ち直ったか、立ち直っていないかに対しても、価値判断はできない。その人の悲嘆のプロセス、立ち直り、家族関係や死生観の変化は、その人の生き方そのものであるからである。筆者がこの研究を通じて痛感したのは、それぞれの悲しみ方、立ち直り方、内面の変化をまず尊重し、そのうえで、遺族に関わっていき、必要であれば援助させていただくべきなのだ、ということである。

5 付記

この卒論、調査をすすめていくなかで、ご自分の臨床的経験から適切なアドバイスをしてくださった、柏木哲夫教授を始め、山本恵子助手、山本一成助手に、最初から最後まで大変お世話になり、感謝いたします。また、淀川キリスト教病院ホスピス医の先生方や、ナースのみなさんには、実際の末期医療の現場を見せていただいたり、貴重な患者さんの遺族のデータを提供していただきました。本当にありがとうございました。

6 参考文献

Bowlby, J. 1981 「母子関係の理論」黒田実郎、他訳『対象喪失』岩崎学術出版社
Deeken, A. 1984 『第3の人生』松井たま訳　南窓社
Glick, I. O. ・Weiss, R. S. &Parkes, C. M 1974 "The First Year of Breavement"John Wiley & Sons, Inc.
平山正実　1984 『生と死を考える』春秋社
柏木哲夫　1978 『死にゆく人々のケア　末期患者へのチームアプローチ』医学書院
柏木哲夫・他　1992 『ターミナルケアマニュアル第2版』淀川キリスト教病院ホスピス編　最新医学社
Küler-Ross, E. 1969 『死ぬ瞬間　死にゆく人々との対話』川口正吉訳　読売新聞社
野田正彰　1992 『喪の途上にて　大事故遺族の悲哀の研究』岩波書店
岡村清子　1992 『高齢期における配偶者との死別』社会老年学　No.36
大内裕子・他　1992 『ホスピスにおける遺族ケア』死の臨床Vol.16 No.1
Parkes, C. M. 1970 "The First Year of Breavement" Psychiatry 33：444-67
Parkes, C. M. ・Weiss, R. S. 1983 『死別からの恢復　遺された人の心理学』池辺明子訳　図書出版社

（臨床老年行動学講座　平成6年度卒業生）